

## 令和3年度「維孝館学園」クリエイト会議 第2回全体会議まとめ

日 時 令和3年11月12日（金）19：00～21：00

場 所 宇治田原町総合文化センター 研修室1他

参加者 山本委員長他28名

（I部）

### 1. 開 会

#### ◎教育長あいさつ

本クリエイト会議は、当初8月に予定をしていたが会議が中止となり、9月3日に、リモートによる会議を開催していただいた。初田先生の講演、そして意見交換という形で皆さんにも学識を深めていただいた。本日は、小中一貫教育施設調査研究事業、本年度の取組などについて事務局から説明させていただいた後、維孝館学園代表の池尻維孝館中学校校長から「育てたい子ども像」について話をいただいて、その内容を基にワークショップを行っていただきます。

### 2. 委員紹介

#### ◎委員長挨拶

このクリエイト会議も今年度で3年目に入り、もう2年間、途中からコロナ禍によっていろいろな予定をしていた講演会、初田先生の講演会、会議が中止や延期になり、前に進んでこられなかった。今年度、第1回目会議が持てたが、ゆっくりと着実にいろいろな方のご意見を聴きながら、小中一貫教育を進めていきたい。ワークショップでは宇治田原町のいろいろな教育やどんな子どもたちに育ってほしいのか、教育は町づくりにもつながります。どんな町にしていきたいのかも意見を出していただきながら、教育を考えていくことを大切にこの会議を進めてまいりたい。

### 3. 小中一貫教育施設調査研究事業について

〈事務局〉 令和6年度の開校に向けた取組を進める中、コロナ禍による先行きが不透明な状況下において、今後の人口動向や税収の見込み、新しい生活様式を考慮し、一貫教育の内容、今後の財政状況や施設整備計画等、開校時期も含め多角的に再検討を行うもの。主な再点検項目は、コロナ禍の影響として、学校における施設面での新型コロナウイルス感染症対策、町税収入の見込み、建設費用等に影響を与える経済動向、関連公共施設計画の検討

として、共同調理場の集約化、住民プールの改修、住民グラウンド学校施設用地への転用、放課後児童施設の設置、既存小・中学校改修費用の試算などである。これらの検討結果による財政シミュレーションを作成し、開校時期も含めて多角的に再検討を行うこととなっている。小中一貫施設一体型の基本方針はこれまでと変わるものではない。しかしながら、例えば、通学部会でのご協議をいただいた内容等について、令和2年度に対象となる保護者への説明会を予定していたことや、地域広報部会で予定をしていたコミュニティ・スクール等の研修協議については、開校時期とも関連することから、本年度は部会を編成せず、必要に応じて全体会議やグループ会議等で対応を図る。

○委員 この調査事業の結果が出て、開校を含めて見直すというタイムスケジュールは現在11月時点でどういうことを考えているのか。逆に言えば今までどれぐらいのところまで進んでいるのか。

〈事務局〉 現在、最終調整中で、12月議会で説明をさせていただく予定としている。

○委員 放課後児童育成施設の設置に関して過去の会議の中で、新設の小中一貫の施設内に放課後児童施設もつくる、田原小学校に今併設されている放課後児童も使うという説明があり、そう決まっているのかと尋ねたところ、もう決まっているとの回答だったが既に決まっていることなのか。

〈事務局〉 その時点では令和6年度開校というのを目標に置いていた中での話であった。今回、その開校時期も含めて調査しているので、現行の田原放課後児童育成施設を使用するかしないかを含めて検討している。

○委員 通学には路線バスを一部使う児童がいるとのことだが、宇治田原町地域公共交通委員会で京都京阪バスは通学で路線バスを使うことがイメージできないと述べられた。通学部会だけの議論では話が進まないの、必要な経費とし通学バスに係る費用もコンサルを入れて試算するべきでは。役場内で一体となって進めていく必要があるのでは。

〈事務局〉 開校時期も踏まえて検討する調査事業であるので、まちづくり推進課と調整を図りながら取り組んでいく。

#### 4. 本年度の取り組みについて

〈事務局〉 小中一貫施設一体型（義務教育学校）の調査、研修としてセミナー「これからの社会と求められる資質・能力とは」の開催、9月3日、ウェブにて開催済み。この後、2部になるが、育てたい子ども像をテーマとするワークショップの開催、先進地校施設、

また必要に応じて全体会議やグループ会議等で調査、研修を行う。なお、先進地校視察については、本町の小・中学校でも運動会等で観覧を保護者に限って実施したことからもより慎重に対応を図ってまいりたい。

○委員 維孝館中学校の本部役員会の中で、今後の小中一体になったときのPTAの在り方が大きな問題との意見が出ている。3校のPTAの活動内容等が大きく異なっている。その部分を開校よりも前に事前調整をして、実際それを統合していくために組織をつくっていく必要がある。PTAの在り方について今後、検討をしていくので協力をお願いしたい。

○山本委員長 どこが主体を持って進めていくのなかなか難しい。クリエイト会議の関わり方も含めて、今後話を詰めていかなければならない。

○初田アドバイザー 通学の問題もPTAの問題もあるし、また学校そのものの教育内容をどうしていくかということを考えていく必要もある。要は、義務教育学校を開校するまでに解決しなければならない課題をまずはすべて挙げることである。委員長がおっしゃったように全ての課題解決をこの会議で図ることはできない。課題を挙げた段階でどのような組織が必要なのかを考え、その組織をまとめていく機能をこのクリエイト会議が担うことになろう。開校時期が変わるのであれば、それが確定した段階でタイムスケジュールを立て、組織をつくって開校に向かう必要がある。例えば、PTAについて論議するPTA部会が必要であるならつくっていかねばならないし、教育内容について考えるためには校長先生方をトップとした部会組織をつくる必要がある。そのようなことを構造化して議論されてはどうかと思う。本日のワークショップが出発点として機能することを願ってこれからの考え方をご提案申し上げる。

## (Ⅱ部)

ワークショップ（テーマ：育てたい子ども像と資質能力を考える。）

○池尻維孝館中学校長 町小中連携一貫教育の在り方検討会議を平成24年度設置し最終、育てたい子ども像を「夢に向かって自ら学ぶ人」「人とのつながり（絆）を大切にする人」

「誇りを持ってふるさとを語れる人」を決めていただいた。その中で、次の年からはこれを基にそれぞれの小・中学校で教育活動を続けていくことになった。

その後、維孝館中学校においては9年間の最終学年3年間を過ごすということからも考え、維孝館中学校の学校教育目標もこの3つに合わせることになった。

9年間でさらに卒業後ももちろんこれを基に最終こういう人が育ってほしいなということの願いを込めて、この3つにしたところである。

今日は、この後のワークショップで、この3つでどのような場面でこれが見られるかと、またどのような資質能力が備わったときにこの3つが達成されたかというふうなことを皆様に考えていただけたらと思う。あわせて、今日皆さんから出していただいたご意見等を基に、最終、町としてどんな全体像を目指していくのかというふうなことにながればいいと思う。

#### 〈ワークショップA班〉

- ・「夢に向かって自ら学ぶ人」では、興味を持ったことに思う存分打ち込める環境がある、いつでも受け止めてくれる見守ってくれる人がいることで様々なことに挑戦する子どもが育つのではないか。認められて褒められることで自己肯定感を持てるような環境があればいい。
- ・「人とのつながり、絆を大切にする人」では、下校時に地域により、外に人がいないの格差がある。地域で何とかしていけない。
- ・「ふるさとを語れる人」は、自然が多いところを残していくべき。

#### 〈ワークショップB班〉

- ・「夢に向かって自ら学ぶ人」では、自信が持てる体験をすることを一回でも多くすることが望まれる。
- ・「人とのつながり、絆を大切にする人」では、中学校2、3年生の間にキャリア教育の基本を教える。これは人とのつながりを大切にするとということにもつながってくる。大人からまたキャリア教育をしていただくことによってその後のつながりもできてくる。人とのつながりを大切にするという意味で、友達を大切に、人のいいところを見つけるというのも大切な視点。
- ・「誇りを持ってふるさとを語れる人」では、いいところを見つけるということ。町内の事業者等、町内産業に関心を持つということも非常に大事。

#### 〈ワークショップC班〉

具体的/抽象的、短期的/長期的、の2つの軸で議論。具体的かつすぐにできることは：1か月か2か月ぐらい先の計画を立てさせること、少し時間をかけて計画を立てるその時間を持つのが大事。夢の実現をイメージすること、どうすれば実現するのか、一緒に考える。将来の夢がお茶屋さんになりたい子が小学3年生にすごく多いという話が出てお茶屋さんが「そんなのうちに研修したらいい」と提言。こういう連携は需要と供給が一致すればすぐにできる。その他には、いろんなことを意識させること、夢を幾つも出

して話し合うこと、知らない人に挨拶させること、宇治田原を外から見たところを他人に伝えること、このあたりはすぐできることであればどんどん実現させてあげるのが重要。次に抽象的ですぐにできることが何かとなると：ガッツを持たせること、一つのことを様々な角度から考えさせること、夢の実現を親子でイメージすること、5年後、10年後と一緒にイメージすること、などが挙げられた。多少時間がかかることもあるが、「親子で一緒に」というのがキーワードになる。そして、具体的で時間がかかることでは：時間を計画的に使えるようになること、同じ方向を向いているライバルがいる環境ができる（をつくる）こと、親が親としての姿勢を示すこと、夢や仕事を支える情報を持っていること、自信や誇りを持てること、成功体験があること重ねられること、が挙げられている。このあたりは時間がかかると思う。最後に、抽象的で時間がかかるより難しいことでは：自分で学ぶ力って何かを考えること、人を利用する力が身につくこと、社会を見る力があること、ふるさととはなにかを知っていること、そもそもそれぞれを考える力があること、裏切らない裏切られない信頼や友情をつくっていくこと、など重要な資質が挙げられた。興味深いと思った一つの視点は、日々学校や家庭の教育で重要な具体的で短期的なことの積み重ねが、最終的に抽象的で時間がかかるこういう重要な力をつけるのに必要ではないか、というものでした。やはり自分のこととして考え、家庭で実践することが重要だと感じた。

#### 〈ワークショップD班〉

夢って何だと。子どもにとって夢って今持てる時代なのかという、そこが先ほど大人目線、子ども目線とあったと思うが、そこがまず疑問に思った。キャリア教育じゃないが、何か見つけたときにそれにアプローチできる、達成できる能力をどこかで養っていく必要があるのではないか。それを夢じゃなくて目標に変える時期は多分高校ぐらいになる。それをつかむためにはどうしたらいいかという、やっぱり学力とか、キャリア教育という、そういうスキルが必要。身につけておかなければ夢は夢で終わってしまう。何かその世界で成功された方とか苦労された方とか、そういう人の話を聞くというのはプロジェクトX的な内容のもの、地元の方でもほかの地域の方でもいいと思うが、そういう話に触れるとか、実際に現地で学べる機会があってもいいのではないか。人とのつながり、絆ではやっぱり挨拶が出てきたが、学校の中でできていることが学外に出たらできなくなるという、汎化しているのかどうかというのが疑問になった。

本町の誇りって何なのかという疑問点があって、この町のよさというのはやっぱり客観的に見られないと分からないという話、地域各校のスペシャリスト、どんな方がどんなこ

とで頑張っているのかと、歴史的なものとかいろいろあると思うが、そこから発見していくという、そういう体験が必要ではないかという話でまとまった。

〈講評〉

○初田アドバイザー

・子どもたちに挨拶は大事だよと言いながら大人でもしていない方が多い。宇治田原町としてどういうふうな社会をつくっていくのか、そのために何をするのかということを考えることが必要になってくる。そのように大人が見せる姿で何を教育していけるのかというような視点も必要ではないか。

・D班では危機管理にすることができていた。学校から危険なものをすべて排除しきった環境で子どもたちを学ばせることで、子どもたち自身に危機管理能力って育つのだろうか。

・例えば組体操は命の危険や重篤なケガが多いなど危険であるとして、今は実施する学校はほとんどないと認識している。目的が明確にあるのならば、どこまでだったらできるのか、どのように行うのか、というようなことを保護者や地域との間で話し合い、合意を形成する、そして、その合意に基づいて少しの危険があるとしても行うんだというようなことも教育には必要ではないか。

・今、学校は門を閉めている学校が多い。インターホンで来校を告げてから入る。しかし、悪意のある人は塀を乗り越えてでも入るわけで、決して安全が担保されたわけではない。ではなぜこのような仕組みを入れるのだろうか。それは、学校としての安全管理を行っているということを言えるようにするためではないのか。むしろ校門を開け、地域の方々の学校への出入りを増やすことで死角をなくし安全な環境をつくるという考え方もある。宇治田原町としてどうするのかということが話し合われるべき。

・多くの班で出てきていたキャリア教育という言葉。今の子どもたちは社会全体が非常に閉塞感漂う中で本当に夢を持つことができるのか。大人が生き生きとした姿を子どもにどのように見せていけるのか、そしてまた生き生きとした人を、例えば学校にどう招き入れていけるかというようなことも考えていく必要がある。

・今年の1月に令和の日本型学校教育という考え方が文部科学省の諮問機関である中央教育審議会から出された。これからの日本の学校教育をどうしていくのか。要約すると、まず今までの日本の教育が次のように4段階で語られている。

・第一段階：日本の教育は学習指導だけではなく、生徒指導、生活指導というような幅広い指導を学校が担ってきた。諸外国とは大きく異なり、非常に狭い範囲を学校の役割

としている国が多い。反して日本は、間口を広げて学力を上げるなどの成果を上げてきた。そのことが世界における高い評価につながっている。

- ・第二段階：社会が変わり子どもたちの様子や学校に存在する課題が多様化してきている。さらに家庭や地域の教育力が昔と比べて変わることで、学校が担うべき役割が肥大化している。

- ・第三段階：その結果、学校の教師は疲弊し多忙の極みである。その結果、教員を志望する子どもたちも非常に少なくなり教員の採用倍率も減ってきている。教員の質が担保できないという状況に来ているということが書かれている。

- ・第四段階このような状況を改善するためには、学校が今まで担ってきた役割を縮小するか、学校が担う役割を変えないのなら教員の担う役割を縮小して、空いたところを他の人材で埋めるのかしかなない。令和の日本型教育で述べられているのは今までの学校の役割を保つことを前提として、教員の役割を学力向上への取り組みなどに集約し、今まで担っていた他の部分を、専門家や地域の人材、関係機関との連携等により補完していくという考え方が必要だ。

- ・ここをつくろうとされている義務教育学校は、新しいスタイルの学校である。学校の役割を明確にし、先生方に頑張ってもらうところはここだということも明確にした上で、学校全体が目指すところを実現するために必要な隙間を地域全体で埋めるていくことでどのような子どもを育てるのか、これが地域の目指す子ども像である。

- ・今後も継続してこのような話し合いを進めていただき、前述したように、計画が見直された段階で、もう一度タイムスケジュールを組み直す必要がある。そして、同時にどのような仕組みで開校までたどり着くのか、そのときにどういう課題を今解決していかなければならないかを話し合っていたきたい。

- ・今からできる範囲で会議を重ね、進捗状況を確認しながら皆さんで力を合わせて考えていただきたいと考える。

#### ○山本委員長

今、初田先生からいただいたアドバイスを、また私たちの中でいろいろ話をしながら、また今日話をしたこととか、それから聞いたこととか、地域の中でまた私たちが一人、二人と増やしていく、前、副委員長の柘植さんが最後の挨拶で、ウェブ会議の中で、一人一人が話を広げていくとどんどん増えていくという、そういうことをまた皆さんで心がけていただけたらなというふうに思う。

